

吉村誠司 デパート初個展を開催!

吉村誠司 日本画展 硝子を透して

【会期】 1月16日(火)～1月22日(月)

【会場】 そのうち横浜店 6階美術画廊

横浜市西区高島2-18-1

☎045(465)5506(直通)



「南国の朝」15号P



「休日のカフェテラス オーストリア メルクにて」10号P

日本美術院を中心に活動し、身2度目の大観賞(1998年)を受賞した作品の題名で務める吉村誠司が、デパートで初めてとなる個展を開催する。展覧会のタイトルとなった「硝子を透して」は、院展で自

制作や絵画への思いを聞いた。

「作品は自然に生み出されるのではなくて、自分で勉強して懸命に生み出すもので、制作するのは苦しいことです。スポーツ選手だって、才能のある選手が必死で努力して競争しているから記録が更新されていきます。これは絵画も同じで、良い作品を創りたいならそうした努力を避けることはできません」

徹底して自己と向き合うことは時に痛みも伴う。そのような心理状態に身をおきながら、日本画という画材に自分を通して作品に落とし込む。そうすることでイメージが重層的に折り重なっている独特の世界に結実する。

東京藝術大学大学院で師事した平山郁夫、福井爽人から多くを学んだという。その一つにスケッチがあり、吉村自身も「スケッチがあるから今の自分があると思っています。福井先生から『スケッチは頭の体操だよ』と言われたことを思い出しますが、目の前の風景を描き起こすのではなく、その風景の何が絵画的なのか、考えたものを留めるのがスケッチで、それはデッサンの勉強とも違います。絵を描くなら観察力と創造力の2つを鍛えていかなくてはなりません。私が教わったように、今は私の生徒たちに伝えています」

約2年前から吉村は、母校である東京藝術大学の教授として後進の指導も熱心に行っている。

「大学は教育機関ですから、売れる絵を描くための絵を教えるよりも、他人と違う作品を創るためにはどうやって勉強をすれば良いのかということとを教えたい。もちろん絵が売れるというのは作家にとってとても大切ですが、流行に惑わされたり、奇をてらったり、分かり易い画面にイメージを限定されないで制作をして欲しいと思います」

この言葉から吉村の絵画への真摯な向き合い方がよく分かる。早くから高い評価を受けてきた吉村がデパートで個展を開催しなかつたのも、研究を志す意識の高さがあつたはずだし、制作点数が限られていることもあるだろう。今展では地方紙の「随想」(共同通信社)のカット画なども含む約35点を出品するが、2年以上の準備期間を経て開催を迎える。「如何に自分の気持ちに添えるように描けるか」を大切に描いた新作を一室に展観する。(編集部)



「オーストリア サルツブルグにて」20号P



「集いかなでる」SM



「雪遊び」SM



Seiji Yoshimura

1960年福岡県生まれ。85年東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業。86年東京セントラル美術館日本画大賞展優秀賞、春の院展初入選。87年院展初入選。88年有芽の会法務大臣賞。90年同大学大学院美術

研究科博士後期課程満期修了。96年院展日本美術院賞・大観賞(98年)。2000年足立美術館賞受賞(11年)。日本美術院同人推挙。07年院展文部科学大臣賞。10年院展内閣総理大臣賞。11年共同通信社配信「随想」挿絵担当。現在日本美術院同人、東京藝術大学教授(16年～)。